

牟田口廉也

「愚将」はいかにして生み出されたのか

広中一成

インパール作戦の 「愚将」 牟田口廉也、 初の本格評伝！

果たして、責任は彼だけに帰せられるべきなのか——。
軍歴を丹念に追い、既存の牟田口像を覆すのみならず、
昭和陸軍の組織的問題に迫る。

牟田口廉也

「愚将」はいかにして生み出されたのか

広中一成

星海社

136



SEIKAISHA
SHINSHO

本書で取り上げる牟田口廉也むたぐちれんやは、日中戦争およびアジア太平洋戦争（当時の日本側呼称は大東亜戦争）の趨勢すうせいを左右する三つの戦いに関わった。

ひとつ目は、盧溝橋事件である。盧溝橋事件とは、一九三七（昭和一二）年七月七日夜、北京（当時は北平）近郊の宛平県盧溝橋で発生した日中両軍の紛争をいう。牟田口は現地日本軍部隊の聯隊長として陣頭指揮を執った。盧溝橋事件をきっかけに日中両軍は戦火を交え、以後八年に及ぶ日中戦争が始まった。

ふたつ目は、マレー作戦の最後を締めくくるシンガポール島攻略作戦である。アジア太平洋戦争開戦とともにイギリス領マレー半島を縦断した日本陸軍は、一九四二（昭和一七）年二月、イギリスの極東防衛の基地であったシンガポール島を落とした。牟田口は第十八師団長として怪我を負いながらも先陣をきって戦い、勝利に貢献した。牟田口は、その勇敢な戦いぶりから、「常勝將軍」とのあだ名がつけられた。以後、日本軍は、シンガポール

島を拠点に南方進出を本格的に展開した。

三つ目は、インパール作戦である。インパール作戦は、アジア太平洋戦争後半の一九四四（昭和一九）年三月から七月にかけて、インド北東部のインパールをめぐる日本軍と連合国軍の戦いをいう。牟田口はビルマ（現ミャンマー）駐屯の第十五軍司令官として、インパール作戦の立案から作戦指導まで関わった。

しかし、牟田口の作戦案は敵戦力を見誤っていただけでなく、補給を軽視したきわめて杜撰な計画で、多くの日本軍将兵がインパールにたどり着くことなく命を落とした。日本軍が撤退した道は、端々に餓死した将兵の骨が散乱していたことから、別名「白骨街道」と呼ばれた。

このインパール作戦の失敗により、牟田口に対する評価は一様に厳しい。たとえば、『太平洋戦争』上・下（中央公論社、一九六五―六六年）や、『東京裁判』上・下（同右、一九七一年）など、アジア太平洋戦争をテーマにした著作を数多く残した作家の児島襄こじまのぼるは、牟田口を「小心な性格」と分析したうえで、次のように述べた。

「小心な性格は、小心なるがゆえにしばしば果敢な行為を好み、著しい克己心をはつきし、また、自己にたいすると同様に他人にも厳しさを求め、性急な行動を好み、偏執的な思想

傾向をもちやすい」（児島1971）。

同じく戦記物を得意とした作家の榎本捨三うめもとすてぞうも次のように牟田口を評した。

「支那事変を初めた責任者はおれだ、従って、大東亜戦争の責任もおれにあるのだから、何としてもインパール作戦に勝って、大東亜戦争を終らすのであるとの信念(?)にこりかたまっていた」（榎本1971）。

そして、昭和史研究で著名な半藤一利はんだうかずとしと保阪正康ほさかまさやすは、牟田口を無謀なインパール作戦を推進した昭和を代表する「愚将」のひとりであったと批難した（半藤二〇〇八）。

仮に児島らが評価するように、牟田口の性格や考え方に偏りがあり、「愚将」であったとするなら、なぜ日本軍はそのような問題を抱えた牟田口を前線へと送ったのか。牟田口に前線の指揮を任せたことで、盧溝橋事件やインパール作戦の「悲劇」が起きたのではないか。

さらに言えば、なぜ「愚将」と評された牟田口という軍人が日本軍のなかから現れたのか。そもそも牟田口とはいったいいかなる人物であったのか。これまで語られてきた牟田口の人物像は、盧溝橋事件とインパール作戦の一場面を切り取った断片的なものばかりで、彼の実像を捉えきれていないのではないか。そのために、「愚将」という人格を貶めるよう

な評価までされるのではないか。

一例をあげると、二〇一七（平成二九）年八月一五日、新たに発見された一次資料や関係者の証言、現地取材をもとに、インパール作戦の全容を追ったNHKスペシャル『戦慄の記録 インパール』が放送された。私は、自宅でパソコンを開きながらこの番組を見たが、内容がインパール作戦の無謀な戦いの状況について及ぶと、SNS上では、作戦を計画指揮した牟田口を非難する書き込みが相次いだ。このなかには、牟田口の人格を否定するようなコメントも散見された。しかし、インパール作戦での牟田口は、あくまで彼の一面であり、このことだけで牟田口の人格を否定したり、「愚将」とレッテルを貼るのは早計ではないだろうか。

本書では、以上あげた疑問点を踏まえたうえで、牟田口の生い立ちから亡くなるまでの一生を順にたどりながら、彼の人物像や人間関係に光を当てる。以上の検討をとおして、アジア太平洋戦争に敗れた日本軍が抱えていた問題についても迫っていききたい。

本書は次の四章からなる。第一章では、牟田口が陸軍軍人の道を志してから、若手エリート参謀として成長していくまでをたどる。ここでは、陸軍大学校を卒業し、陸軍省でエ

リート参謀となった牟田口が、どのような人物と関わり、彼らと何をしたのか。なぜ、牟田口は陸軍中央から盧溝橋の前線部隊へと送られたのか。これら問題を陸軍中央の派閥対立を踏まえながら探る。

第二章から第四章までは、牟田口が参加した主要な作戦を取り上げて論じる。第二章では、盧溝橋事件での牟田口の動向をみていく。そもそもなぜ盧溝橋事件は起きたのか。牟田口は盧溝橋事件でどのような対応をとったのか。牟田口の中国認識、ならびに牟田口の上司となった支那駐屯歩兵旅団長の河邊正三少将との関係から考察する。

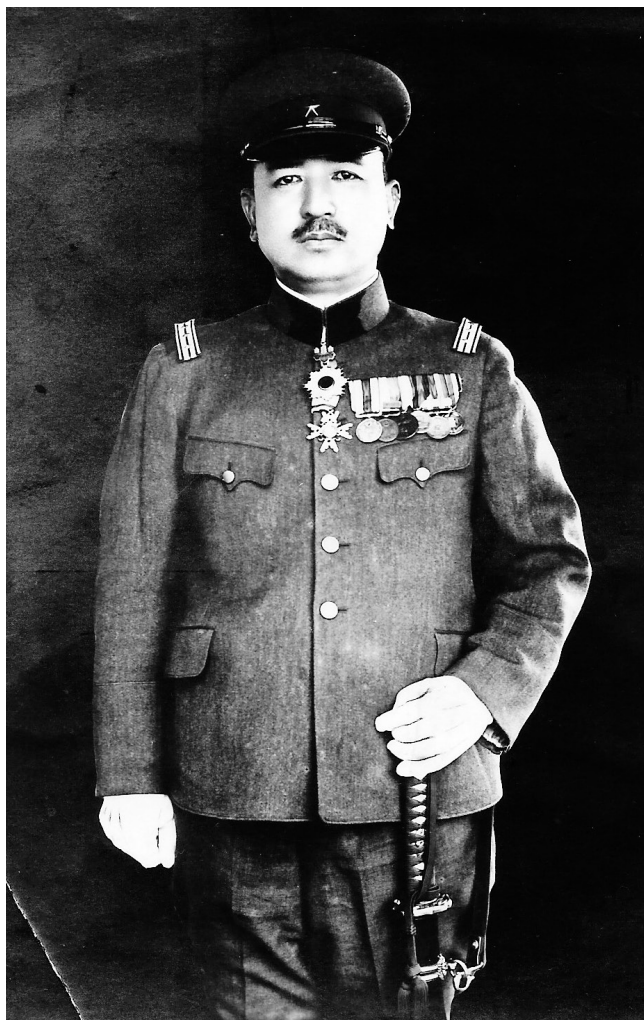
第三章では、太平洋戦争の火蓋を切ったマレー作戦での牟田口の戦いぶりを探る。マレー作戦は、牟田口にとって局地紛争の盧溝橋事件とは異なる初めての本格的でかつ大規模な戦闘であった。牟田口は、マレー作戦をどのように戦ったのか、「常勝將軍」とあだ名されたシンガポール島攻略作戦での戦いぶりはどうであったのか、それら戦いからみえてくる牟田口の作戦指導の問題点は何であったのか考察する。

第四章は、牟田口が中心となって実行されたインパール作戦を取り上げる。牟田口はなぜインパール作戦を計画したのか。無謀といわれたインパール作戦を止めることができなかったのか。牟田口をめぐる人間関係に着目し検討する。

なお、本書執筆にあたっては実証を旨とし、戦後防衛庁防衛研修所戦史室（現防衛省防衛研究所戦史室）がまとめた『戦史叢書』シリーズをベースに、同戦史室、国立国会図書館憲政資料室、靖国神社偕行文庫に所蔵されている牟田口の回想録や口述記録、そのほか公刊されている関連資料、ならびにアジア太平洋戦争に関する研究書を適宜参考、引用した。

引用文献がカタカナ書きの場合はひらがな書きに直し、適宜句読点を補った。参考文献と引用文献を本文中で使用した場合、煩雑にならない程度に著者（著者が示されていない場合は資料名）と出版年または資料作成年のみ示した。文献として頻出する『戦史叢書』については、著者名でなく叢書の巻数を記した。

本文ならびに引用文中の漢字は読みやすさを考慮し、人名や特別な場合を除き、概ね新字体を用いた。本文中の固有名詞や引用文の一部に、現在不適切とされることばが含まれているが、それらは歴史的用語とみなしてそのまま使用した。



牟田口廉也（森千鶴氏所蔵）

第一章 エリート参謀からの転落 17

「葉隠」のもとに生まれる 18

佐賀と海軍 21

宇都宮太郎と佐賀左肩党 23

熊幼精神 29

士官学校第二二期生 33

宇都宮と出会う 37

陸大教育の功罪 38

陸大から参謀本部へ 42

新たな国際秩序の形成 43

軍縮と軍人忌避の時代 46

一夕会の結成 49

満洲情勢の緊迫化 53

桜会とふたつのクーデター未遂 58

皇道派と統制派の対立 62

二・二六事件と陸軍中央からの「左遷」 65

第二章 日中戦争の火蓋を切る — 盧溝橋事件 71

支那駐屯軍の増強と支那駐屯歩兵旅団の創設 72

綏遠事件 75

支那駐屯軍の豊台駐屯 78

豊台事件 80

第二十九軍に対する不信 85

新たな国防方針の確立 88

華北情勢の悪化 90

石原の方針に従った河邊旅団長 94

「謎の一発」 96

牟田口の不可解な命令 100

河邊の無言の抗議 104

国民政府の対応 109

停戦協定と日本軍の増派 110

牟田口の別の一面 114

第三章 「常勝将軍」の誕生 — シンガポール島攻略作戦 117

中国戦線から太平洋戦線へ 118

第四章

インパール作戦

——敗戦の責任は誰にあったのか

159

叶わなかった陸軍中央復帰 123

マレー作戦の計画立案と研究 125

命を懸けた作戦準備 128

イギリス軍のシンガポール防衛 131

コタバルとシンゴラへの上陸 134

マレー作戦に出遅れた牟田口部隊 139

シンガポール島攻略作戦 141

混乱のなかでの負傷 144

ブキテマ高地の占領 149

シンガポール島陥落 154

ビルマルートの遮断をめぐる 160

- 第十五軍の創設とイギリスのビルマ防衛 162
- タイ進駐とビルマ進攻 166
- ビルマ作戦の開始 168
- マンダレーへの猛進 173
- ビルマ作戦の完了と連合軍のビルマ撤退 177
- 二十一号作戦の中止 178
- 連合国軍のビルマ奪回計画 183
- ウィンゲート旅団の進攻とビルマの防衛の転換 187
- 武号作戦をめぐる対立 190
- 「暴走」する牟田口とそれを許した河邊 195
- 運命の兵棋研究 199
- 絶望的な補給問題 201
- 「ウ」号作戦の決定 204
- 南方軍総参謀副長の交代 211
- 牟田口のインパール作戦への自信 213

インパール作戦の決定 215

連合国軍の反転攻勢 219

前線部隊に広がる作戦への不安 221

致命的な戦力不足と作戦開始の遅れ 224

インパール作戦の中止を求めた柳田師団長 227

山内師団長の更迭 231

佐藤師団長の独断行動 236

佐藤師団長の更迭 242

牟田口と河邊の更迭 246

責任は牟田口だけにあるのか 251

おわりに インパール作戦の呪縛 255

あとがき 263

参考文献一覧 265

第
一
章
エ
リ
ー
ト
参
謀
か
ら
の
転
落

「葉隠」のもとに生まれる

一八六七（慶応三）年一〇月一四日、江戸幕府一五代将軍の徳川慶喜は、朝廷に大政奉還を申し出た。これにより約二五〇年続いた江戸幕府の治世は幕を閉じた。

徳川慶喜は政権を朝廷に返上してからも、朝廷のもとで徳川家と諸藩の合議制による連合政権を成立させようとした。しかし、倒幕派の薩摩藩と長州藩は、徳川家に政局の主導権を握らせないため、一二月九日、王政復古の大号令を発し、徳川家を排除した新政府を樹立した。

これに対し、徳川家を支持する旧幕府側は、一八六八（慶応四）年一月、藩兵を率いて新政府軍を攻撃し、その後一年半に及ぶ戊辰戦争が始まった。

同年四月、江戸城を無血開城させた新政府は、一〇月、江戸から改称した東京に明治天皇を迎え入れた。そして、一八六九（明治二）年初め、新政府も東京に移り、遷都が断行された。

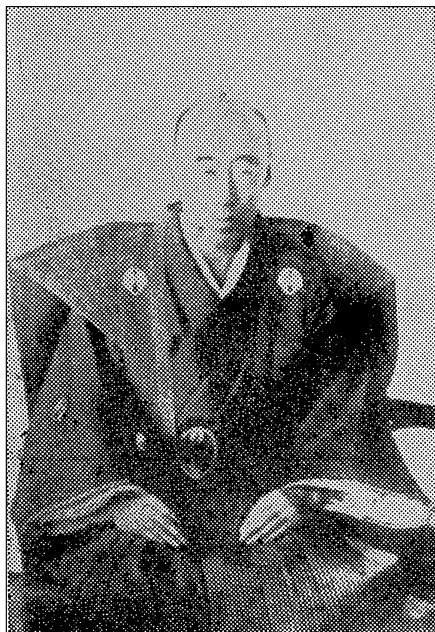
明治新政府成立の立役者となったのが、薩摩・長州・土佐・肥前（以下、佐賀）の四つの雄藩であった。雄藩とは、江戸時代後期に財政改革を實行して藩財政を回復させ、領内の商工業の発展や軍事力の強化に成功した藩をいう。宇和島藩や福井（越前）藩も雄藩に数え

られる。

四つの雄藩のうち、佐賀藩は全国の藩のなかでも、とりわけ財政難に苦しんでいたことで知られた。もともと、佐賀藩の財源となる佐賀藩主鍋島氏の直轄地（蔵入地）が大きくなかったことに加え、江戸幕府から建築土木の普請役や、長崎警備の任を課されたり、参勤

交代を行ったりする費用が膨大にかかった。そのため、早くも一六四三（寛永二〇）年頃には負債がかさみ、利息の支払いだけで借り入れをしなければならぬ有様であった。この危機的な藩の財政状態は江戸時代末期まで続いた。

この佐賀藩の財政難を劇的に回復させ、同藩を雄藩のひとつにまで成長させたのが、一〇代藩主の鍋島直正（号は閑叟）であった。直正は質素儉約を励行しつつ、一三万両に達していた負債



鍋島直正（閑叟）。江藤新平、大隈重信とともに「佐賀の七賢人」に数えられた（三好 1981）

を、利子なしの数十年の年賦に変えたり、一部だけ支払って残りを踏み倒したりして、負債を徐々に減らしていった。そのうえで、直正は佐賀名産の陶器を専売制にして江戸や京・大坂などで販売し、大きな利益を上げた。

蘭学好きとして知られた直正は、専売で得た資金を元手にオランダから蒸気機関や大砲などを購入したり、若い藩士たちに蘭学を学ばせたりして、藩内を洋式化していった。一八五八年には、筑後川支流の早津江川河畔に蒸気船の建造と修理の可能な三重津海軍所（御船手稽古所）を創設した。ここで造られた「凌風丸」は、日本初の実用蒸気船であった。

このような激動の佐賀藩を支えた藩士たちが行動の規範としたバイブルが、『葉隠』（『葉隠聞書』）であった。『葉隠』は、一七一六（享保元）年、佐賀藩第二代藩主の鍋島光茂に仕えた山本常朝の^{やまもとじょうちよう}ことばを、藩士の田代陣基が^{たしろつらもと}聞き書きをしてまとめたもので、武士道精神を知るための必読書とされた。

その『葉隠』を世に知らしめたのが冒頭にある次の一文である。

武士道と云ふことは、即ち死ぬことゝ見付けたり。凡そ一ツ二ツの場合に、早く死ぬかたに片付くばかりなり。別に仔細なし。胸すわりて進むなり（中村1978）。

(現代語訳…武士道とは、死ぬことである。生か死かいずれか一つを選ぶとき、まず死をとることである。それ以上の意味はない。覚悟してただ突き進むのみである〔山本2004〕。)

死を恐れず肯定的に捉えるのが武士道であるという『葉隠』の発想は、新渡戸稲造の編んだ『武士道』にも採用され、日本だけでなく海外にまで広く知れ渡った。「生きて虜囚の辱めを受けず」の一節で知られ、アジア太平洋戦争で日本陸軍将兵に玉砕や自決を促したとされる『戦陣訓』は、この『葉隠』で明文化された武士道の概念が根底にあった。

この『葉隠』の伝統が遺る佐賀に、一八八八(明治二二)年一〇月七日、牟田口廉也は生まれた。廉也は福地信敬を実父としたが、幼くして旧佐賀藩士族の牟田口衛常の養嗣子となり、以後、牟田口姓を名のった。

佐賀と海軍

牟田口の生まれた佐賀県は、幕末に三重津海軍所が設立された影響もあって、鹿児島県とともに、多くの海軍将校を輩出した。たとえば、牟田口が生まれる前年の一八八七(明治二〇)年までの佐賀県出身の海軍将官の人数は、鹿児島県の八人に続く全国第二位の三人

(中牟田倉之助、真木長義、相浦紀道)であつた。

また、一八七二(明治五)年の日本海軍創設から終戦までを通してみても、佐賀県出身で海軍大將にまで進んだ人数は、トップの鹿児島県の一七人に続く六人(村上格一、安保清種、百武三郎、百武源吾、吉田善吾、古賀峯一)であつた。

このなかで、村上、安保、吉田の三人は、いずれも海軍大臣(村上は清浦内閣、安保は濱口内閣・第二次若槻内閣、吉田は阿部・米内・第二次近衛内閣)を経験し、百武三郎は一九三六(昭和一一)年一月から一九四四年八月まで、侍従長として厳しい戦局に直面する昭和天皇をそばで支えた。そして、古賀峯一は、太平洋戦争中にソロモン諸島で墜落死した山本五十六海軍大將に代わって、連合艦隊司令長官に就任し有名となつた。

一方、旧軍期全体での佐賀県出身の陸軍大將の人数は、海軍のそれよりもふたり少ない四人(宇都宮太郎、武藤信義、緒方勝一、真崎甚三郎)であつた。

佐賀県では、人気のある海軍に人材が集中したのと、一八七四(明治七)年に発生した佐賀の乱の影響で、陸軍草創期に陸軍将校を志望する者がわずかしかいなかった。佐賀の乱とは、薩長による明治政府の専制政治(有司専制)に不満を持った佐賀出身の政治家、江藤新平が不平士族を率いて起こした反乱をいう。

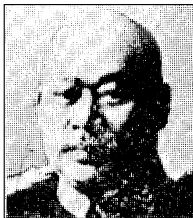
日本陸軍は長州藩の大村益次郎おおむらますじろうの構想に基づいてできあがり、創建時、日本初の陸軍大將となった薩摩の西郷隆盛さいごうたかもりと、兵部大輔として陸軍の実務を取り仕切っていた長州の山県有朋やまがたありともが権力を二分していた。しかし、西郷が征韓論をめぐる論争に敗れて江藤と同じく下野すると、陸軍の実権は山県を中心とする長州出身者に握られた。彼らが陸軍内で形成した派閥を、出身地名をとって長州閥（長閥）という。

佐賀の乱で長州に牙を剥いた佐賀県人は、長州閥が支配する陸軍に抵抗感を持ち、将来の進路にすることをよしとしなかった。

宇都宮太郎と佐賀左肩党

多くの海軍将校を生んだ佐賀にあつて、「佐賀県に輩出した幾多の傑出した將軍連の元祖であつた」（額田1977）と評されたのが、佐賀で最初の陸軍大将となつた宇都宮太郎であつた。宇都宮は、一八六一（文久元）年三月、佐賀藩士の家に生まれた。海軍将校になることを志した宇都宮は、はじめ東京の攻玉社こうぎよくしや（現攻玉社中学校・高等学校）に入学した。

攻玉社は、明治六大教育者のひとりといわれた近藤真琴こんどうまことが、一八六



宇都宮太郎。

子息の宇都宮徳馬は戦後衆議院議員として活躍した
（『歴史と旅 特別増刊号 44』1990）

三（文久三）年に創設した蘭学塾を前身とする。蘭学塾では、西洋伝来の数学やオランダ語のほか、汽船を操縦するための航海術や測量術などが教授され、海外に出ることを夢見る若者が全国から集まった。

一八六九（明治二）年、蘭学塾は、築地海軍操練所（後の海軍兵学校）の敷地内に移転し、校名を攻玉塾に改めた（一八七二年に攻玉社と改称）。名前の由来は、四書五経のひとつ『詩経』の一文、「他山の石以て玉を攻くべし」（「攻玉社中学校・高等学校」HP）であった。攻玉社は、海軍将校になるための予備校的役割を担い、ここを優秀な成績で卒業できれば、海軍将校養成機関の海軍兵学校へ進む道が開けた。前述の村上格一、安保清種、百武三郎は、いずれも攻玉社の卒業生であった。

宇都宮も彼らと同じく、攻玉社から海軍兵学校へ進学するかと思われた。しかし、宇都宮は攻玉社から陸軍幼年学校に転じ、陸軍将校となる道を選んだ。

一八八五（明治一八）年六月、陸軍士官学校を卒業（士官生徒第七期）した宇都宮は、尉官となつて、青森歩兵第五聯隊と近衛歩兵第四聯隊でそれぞれ勤務した後、一八八八年一月、陸軍大学校（陸大）に入學した。

陸大では、部隊指揮官である将校に高度な用兵技術と、軍事研究に必要な知識を修得さ

せる教育が行われた。陸大に入るには、二年以上の聯隊勤務を経験した中尉と少尉のなかから、健康で学識に富み、勤務態度が真面目で、かつ志の高い者を所属聯隊長が推薦し、さらに、厳しい選抜試験に合格しなければならなかった。しかし、陸大に入学し、優秀な成績をあげて修了すれば、その後の陸軍内での出世はほぼ約束された。

陸大修了者の証しとされたのが、軍服の右横腹の位置に取り付けることが許された銀色の徽章きしやうであった。この徽章は、江戸時代後期の天保年間に鑄造された天保通宝と形状が似ていたことから、俗に天保錢てんぽうせんといわれ、徽章を身に付けた将校の集まりを天保錢組と称した。これに対し、陸大に進まなかった陸軍士官学校修了者は無天、または無天組と呼ばれた。

天保錢組は、同期の無天組と比べて陸軍階級の進度が早く、軍内の重職にもいち早く配属された。そのため、天保錢組は陸軍での特別な存在としてエリート意識を持った。しかし、そのことがかえって陸軍内で派閥対立を生み出す原因となり、その後の日本を混迷の道へと向かわせた。

一八九〇（明治二三）年一二月、宇都宮は成績上位の優等で陸大を修了した。優等には選ばれた者は、天皇臨席の卒業式で、天皇から恩賜品おんしが下賜され、一生の榮譽とした。

陸大優秀のエリートとして将来を嘱望された宇都宮は、一八九二（明治二五）年四月、参謀本部附となり、日清戦争開戦後の一八九四（明治二七）年十一月、参謀本部第二局員に任じられた。当時、参謀本部は第一局と第二局に分かれていて、第一局はおもに作戦計画や部隊編製の策定を担当し、第二局は作戦計画や陣中要務の規定作成や、国外の軍事問題の調査を行った。

文書の作成と調査を専らとした第二局に対し、部隊の運用に直接関わった第一局は、参謀本部の中心であった。宇都宮が参謀本部員になったときに、第一局長を務めていたのが、長州出身で後に首相となる寺内正毅大佐であった。

寺内は戊辰戦争や西南戦争を経験し、西南戦争では最大の激戦となった田原坂の戦いで右手を負傷し、以後、不自由を余儀なくされた。日清戦争では大本営運輸通信長官を務め、そのときの手腕が評判を呼び、陸軍内で一目を置かれるようになった。

その後、寺内は教育総監、参謀本部次長、陸相と陸軍内の出世街道を上り詰め、一九一六（大正五）年一〇月には、内閣総理大臣に就任した。軍事史家の松下芳男は、山県有朋から寺内正毅に至る長州閥の陸軍支配について、「長閥を徳川幕府に見立てるならば、山県有朋は家康であり、桂太郎は秀忠であり、そして寺内はまさに三代將軍家光であろう。徳川

幕府は、家光の時代にいたって、安定したと同じように、陸軍の長閥は、寺内の時代において、その全盛期にたつたと見るべきである」（松下1976）と評した。

すなわち、佐賀出身の宇都宮にとつて、長州閥でないことは、いくら陸大恩賜のエリートであっても、陸軍での出世栄達の道が閉ざされていることを意味した。

『葉隠』を手本とした佐賀藩士は、武士らしく主君に対する義を重んじたと思われがちであるが、一方で、自分の利益に執着したと酷評された。その原因のひとつといわれているのが、佐賀藩が家督相続をする藩士に課した試験であった。藩財政に窮していた佐賀藩は財源確保の一策として、試験で一定の点数を取れなかった藩士の家禄を削った。そのため、家禄を残したい藩士たちは、試験勉強に励む反面、性格にはつらつさがなくなり、内向きで利己的になったという（藤井2007）。

宇都宮の性格が佐賀藩士のそれと同じであったかどうかは議論の余地があるが、参謀本部に入った宇都宮は、当時、極東進出を図りつつあったロシアに対する攻勢的防御策を意見書にまとめ、それを寺内より上位の参謀本部次長の川上操かわかみそうろうく六中将に提出した。川上は長州閥と対立関係にあった薩摩閥の中心人物のひとりであった。川上は宇都宮の意見を高く評価したという。

さらに、宇都宮は薩摩閥の実力者で後に陸相にまでなる上原勇作と懇意になり、薩摩閥に人脈を広げていった（斎藤2007）。上原にとっても、薩摩閥のなかに期待をかけられる人材が見当たらず、若手ながら手腕があり、かつ反長州閥で共通する宇都宮と結びつくメリットは充分にあつた。

宇都宮は、薩摩閥と手を組む一方で、佐賀出身の陸軍将校を中心とした自身の派閥も形成していった。宇都宮を中心にできあがった佐賀閥は、当時、「佐賀左肩党」と呼ばれた。その名の由来は、一八七六（明治九）年三月、士族の反乱が相次いだ結果、明治政府が廃刀令を出すと、「葉隠武士」としての強いプライドを持っていた佐賀士族は、あたかもいまだ刀を差しているかのように左肩を高く上げて歩いたという。彼らのこの様子からその別称が生まれた。

宇都宮を中心とした佐賀閥は、長州閥に近づいていった大分閥を除く九州各県、ならびに佐賀とともに明治維新を達成しながらも明治政府で不遇をかこった高知出身者らと連携し、陸軍の権力を独占する長州閥と対抗した（藤井2007）。

熊幼精神

宇都宮が陸軍内を回りながら、必死になって反長州閥の人脈を作りあげていた頃、牟田口は勉学に精を出し、佐賀の難関校、佐賀中学（現佐賀県立佐賀西高等学校）に進学していた。

当時、佐賀中学は、海軍兵学校の合格者を多く輩出する全国屈指の学校であった。前述

の佐賀出身の海軍大将のうち、村上格一を除く五人は全員佐賀中学出身であった。

また、国家改造を主張した大川

周明しゅうめいや北一輝きたいつき、血盟団事件の首謀者の

井上日召いのうえにっしょうらの影響を受けて、昭和維新

運動に関わった海軍青年将校の藤井齊ふじいひとし、

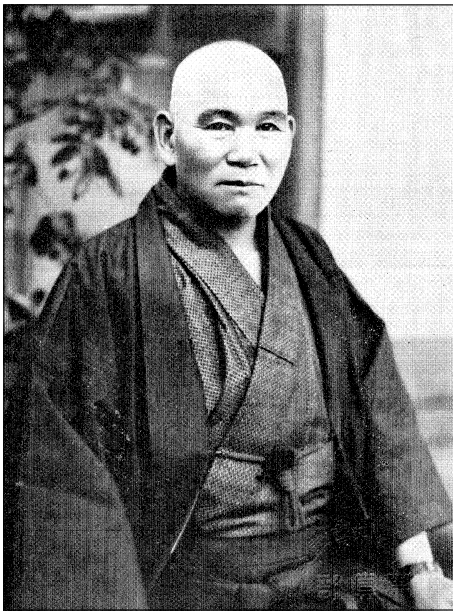
同じく海軍将校で、五・一五事件を引き

起こした三上卓みかみたくも同校を卒業してい

た。ちなみに、三上卓の妻わかは、宇

都宮太郎の姪にあたる。

このように、海軍将校が目立つ佐賀



真崎基三郎。荒木貞夫とともに陸軍皇道派を率いた（田崎 1977）

中学の卒業生のなかで、異色の存在が後に牟田口の運命を大きく左右することになる二・二六事件の首謀者のひとり、真崎甚三郎であった。真崎は牟田口よりも一〇歳年上で、ただこのときふたりが相知ることはなかった。

牟田口が佐賀中学に入學した一九〇〇年代初頭、日本国内では、日清戦争後のロシアの極東進出に対抗するための軍備増強が急ピッチで進められていた。特に陸軍は、軍備増強の重点を兵力量の増加に置き、師団（一個師団の兵数は平時で約一万余千人、戦時で約三万人）の新設や戦時要員の育成の実現を目指した。その結果、一八九八（明治三二）年、これまでの常設七個師団（近衛と第一―第六師団）に加え、六個師団（第七―第十二師団。第七師団のみ一八九六（明治二九）年に編成）と、騎兵および野砲兵各二個旅団が新設された。また火器も新式に改められ、今後予想されるロシアとの戦いに備えた（森松1990）。このように、この時期、陸軍の存在感は日本国内で高まっていった。

以前から、佐賀中学の学生で軍人を志す者のほとんどは、海軍兵学校への進学を希望した。しかし、牟田口は、陸軍に将来の活路を見出し、一九〇三（明治三六）年、佐賀中学を中退して、熊本陸軍地方幼年学校に進んだ。一八九四年の日清戦争以降、日本では陸軍軍人になるために幼年学校を受験する若者が急増していた（広田1997）。牟田口もそのひと

りであった。

陸軍地方幼年学校は、将校を養成する陸軍士官学校に入校する者のための予備的教育を施す三年制の教育機関で、当時、熊本のほか、東京・仙台・名古屋・大阪・広島の計六ヶ所にあった。そして、地方幼年学校を卒業すると、東京市ヶ谷にある修業期間一年九ヶ月の陸軍中央幼年学校に入校することになっていた。

当時、幼年学校から士官学校を経て陸軍大学へ進むルートは、東京帝大に進学するエリートコースと同一視された。そのため、幼年学校出身者は、同年代の中学校出身者よりも周囲から特別な目で見られた。

牟田口が入校した熊本陸軍地方幼年学校、略して熊幼は、一八九七（明治三〇）年四月、旧熊本藩（肥後藩）家老長岡監物ながおかけんちつの屋敷跡である熊本城内の監物台（現監物台樹木園）に建てられた。当時、熊本城内とその南側に広がる平地は軍用地で、熊幼が創設されたとき、ここには熊本第六師団司令部をはじめ、歩兵第十三聯隊、歩兵第二十三聯隊（二九二五〔大正一四〕年に宮崎都城に転営）、騎兵第六聯隊、砲兵第六聯隊、輜重兵しちゆうへい第六大隊の各施設があった。熊幼には、九州地方を中心に将校となるのを夢見た多くの若者が集まった。熊幼卒業生からは、陸軍エリート参謀の代表格で、終戦後に大本営代表として米艦ミズーリ号上で降

伏文書にサインした梅津美治郎大将や、東京帝大で経済学を学んだ秀才で、戦時中に企画院調査官や、内閣総合計画局長官などを務めた池田純久中将、日中戦争が起こると参謀本部中枢で積極的に戦線拡大を唱えた武藤章少将など頭脳明晰な能吏型、または政治志向型の将校が生まれた。

その反面、沖縄戦で激闘の末自決した牛島満大将と長勇少将といった猛将型の将校も数多く輩出した（大江1981）。牟田口は後の戦場での活躍から後者に分類できよう。また、二・二六事件に関与した青年将校のなかにも熊幼出身者が数人いた。

彼らのような血気盛んな将校が熊幼から出たのはなぜか。熊幼出身で、長く参謀本部に勤務した井本熊男によると、彼らの発想の根本には、熊幼の教育で培われた「熊幼精神」が備わっていたという（井本1981）。

熊幼など幼年学校で行われた授業は、おもに軍人となるうえで必要な精神を鍛え上げる訓育、体操や武道などの術科、語学や中学校程度の知識を学ぶ普通学の三つに分かれていた。

陸軍では部隊を指揮し、かつ将兵の団結と統制の要となる将校の人的資質が重視されたことから、幼年学校の教育のなかでも、特に精神教育である訓育に力が注がれた（木下1

981)。この精神は別名「軍人精神」と呼ばれた。後のアジア太平洋戦争で、将校たちが「軍人精神」に頼って無謀な戦いを繰り返したことを考えると、その遠因に、この幼年学校の精神教育があったといえる。「熊幼精神」は、この精神教育の一種であった。

士官学校第二二期生

牟田口は熊幼を成績トップの優等で卒業すると、東京の陸軍中央幼年学校に進んだ。そして、中央幼年学校を順調に卒業すると、牟田口は東京を離れ、熊本歩兵第十三聯隊の隊附士官候補生となった。この隊附勤務は、ドイツ陸軍の兵制を採用し、陸軍士官学校に上がる前の入校予定者に、兵として陸軍の現場に触れさせる制度で、このとき配属された部隊を、その士官候補生の原隊といった。

牟田口は、隊附勤務を終えると、一九〇八（明治四一）年一二月、再び上京し、市ヶ谷台の陸軍士官学校に入校した。この頃、日本は桂太郎さいおんじと西園寺公望きんもちが交互に首相となる桂園時代を迎えていた。第一次西園寺内閣期の一九〇七（明治四〇）年、日本陸海軍は日露戦争後の日本の軍事戦略の基本方針をまとめた「帝国国防方針」を策定した。この方針では、ロシアを第一の仮想敵国、アメリカを第二の仮想敵国とした。そして、これらに対抗する

ため、陸軍を平時二十五個師団、戦時五十個師団に増設し、海軍に戦艦八隻、巡洋戦艦八隻からなる、いわゆる八・八艦隊の完成を目標に定めた。

日露戦争で戦時編成のもと、約一〇〇万人の兵力を戦場に投入した日本陸軍は、その際、臨時に増設した師団を戦後も解体することなく常設の部隊とした。その結果、一九〇七年までに、日本陸軍は日露戦争前から六個師団多い全十九個師団を保有するまでになった。

兵力の増大は、当然ながら彼らの活動を支える日本の国家財政に大きな負担を与えた。また、その財政難に追い打ちをかけるように、一九〇七年一〇月、アメリカで発生した金融恐慌をきっかけに、一九〇八年初頭、日本を戦後恐慌が襲った。日本政府は財政を立て直すため、公共事業の中止や一部税金の増額と新税の創設を実行した。これに対し、恐慌で苦しんでいた中小企業経営者や労働者は強く反発し、商業会議所連合会は、増税と新税の反対、ならびに三悪税といわれた塩専売・通行税・織物消費税の廃止を訴える運動を起こした(坂野1989)。

このように日本国内の政治経済が混乱をきわめるなか、陸軍は将来二十五個師団の増設が達成された際、指揮を執る将校が多数必要となるという想定から、陸士第二二期生の採用人数を、前年と比べて三〇〇人ほど多い七百数十人に増やした。

陸軍士官学校は、陸軍将校の養成機関として一八七四（明治七）年に発足した。士官学校の教育は、基本的に幼年学校の科目に準拠していたが、語学については、幼年学校ですで行われていたフランス語・ドイツ語・ロシア語のほか、英語と中国語が新たに加わった。また、術科では実戦で必要な戦術や、武器を使った教練が実施された。

長州閥の陸軍支配は、このときの士官学校の教育にも及んでいた。士官学校に長州出身者が入学すると、教官らは長州閥の心証をよくするため、彼らの成績が芳しくなくても、無理やり点数を与えて卒業させた。こうすることにより、教官も長州閥から優遇を受けた（上法1973）。長州出身でない牟田口にとって、士官学校は決して居心地のよいところではなかった。

牟田口と机を並べた陸士第二二期生は、例年よりも人数が多かったせいも、个性的な人材が揃った。その代表格は、鈴木率道すずき よりみちと鈴木貞一すずき ていいちであった。このふたりは姓を同じくしたが、それぞれ対照的な道を歩んだ。

鈴木率道は陸士と陸大をもとに優等で卒業した秀才であった。しかし、鈴木率道は性格に難があり、陸軍内では「蛇のように執念深く、氷のように冷酷である」（今西1975）と言われ、しばしば参謀本部の同僚と衝突した。特に、参謀本部作戦課に勤務していたとき

の上司のひとりであった東條英機大佐と折り合いが悪かった。そのため、その後、東條が陸軍中央で発言力を持つようになる、鈴木率道は参謀本部から外され、在外部隊での勤務を余儀なくされた。

もうひとりの鈴木貞一は、成績は鈴木率道に劣るが、陸大卒業後、参謀本部支那課員や上海駐在武官など、中国事情に詳しい、いわゆる「支那通」軍人となった。性格は「無恥ではないにしても「厚顔」が彼のための造語かと思われるほど、あつかましい男だった」(同右)という。その性格が幸いしてか、鈴木貞一は鈴木率道とは違い、東條英機とも親しく付き合い、東條内閣で企画院総裁を務めた。鈴木貞一は軍人でありながら、政治家として背広姿でいることが多かったことから、「背広を着た軍人」と言われた。終戦後はA級戦犯として終身禁固刑を受けた(一九五六〔昭和三一〕年赦免)。

彼ら以外の同期をあげると、一九三八年、日本軍占領下の上海に成立した傀儡政権、中華民国維新政府で最高顧問を務めた原田熊吉、太平洋戦争でタイ国駐屯軍司令官を務め、その温厚な性格から、「ホトケの中将」と言われた中村明人、ロシア通として知られ、北支那方面軍参謀長などを歴任した笠原幸雄、後述する盧溝橋事件で、北京特務機関長として事態の收拾にあたった松井太久郎、太平洋戦争中、第十八軍司令官としてニューギニア戦

線を指揮した安達^{あだち}二十三^{はたせう}、興亜院華北連絡部長官として、北京の傀儡政権、華北政務委員会を指導した森岡^{もりおか}皐^{はじめ}、張家口特務機関長として、日本軍の内蒙古進出に携わった松井^{まつい}源之^{げんの}助^{すけ}などがいた。

総じて、第二二期は陸軍中央よりも前線で活躍した者が多かったといえよう。

宇都宮と出会う

一九一〇（明治四三）年五月、牟田口は陸軍士官学校を卒業し、隊附見習士官として原隊の熊本歩兵第十三聯隊に戻った。ここで少尉になるまでの約三ヶ月間、上官から将校としてのイロハを叩き込まれた。

牟田口が少尉に任官した後の一九一一（明治四四）年五月二〇日、宇都宮太郎が牟田口の母校である熊本地方幼年学校などを視察に訪れた。このとき、すでに少将にまで進んでいた宇都宮は、参謀本部の中樞を担う第一部長と第二部長を歴任し、陸軍中央で確固たる地位を築いていた。

この日の宇都宮の日記には次のことが書かれていた（宇都宮太郎関係資料研究会2007）。

午后一時より偕行社にて熊本衛戍中少佐に凶上戦術問題を課し臨場す。在熊同郷
将校歩大尉永松三郎、同中尉川浪清吉、同久米乙彦、同少尉牟田口廉也（歩十三）来
訪、引見之を励ます。

このとき、牟田口は宇都宮と具体的にどのようなことばを交わしたのかはわからないが、
はるか上の立場になっていた同郷の宇都宮から励ましを受け、大きな刺激となったことだ
ろう。

陸大教育の功罪

一九一四（大正三）年六月二八日、オーストリアハハンガリー帝国に属するボスニアの中
心都市サラエボで、同帝国の皇位継承者だったフランツ・フェルディナントがセルビア人
民族主義者のガヴリロ・プリンツィプに暗殺された（サラエボ事件）。この六年前の一九〇八
年、オーストリアハハンガリー帝国が、スラヴ系民族が多く住むボスニアを完全併合した
ことに、隣国で同じくスラヴ系のセルビアが強く反発していた。

一ヶ月後の七月二八日、オーストリアがセルビアに宣戦布告すると、オーストリアを支

援するドイツなど同盟国と、それに対抗するイギリス・フランス・ロシアなど連合国が参戦し、ヨーロッパ全土を巻き込んだ第一次世界大戦が勃発した。

当初、戦いは同年のクリスマスまでには終わるものと思われた。しかし、その予想に反し、近代兵器を投入した総力戦は、その後、一九一八年一月に休戦協定が結ばれるまでの四年余り続き、ヨーロッパを焦土と化した。

第一次世界大戦が始まってから五ヶ月後の一九一四年一二月、牟田口は、陸軍の最高教育機関である陸軍大学校に入学した。陸大を受験するには、隊附勤務を二年間務めた中・少尉のなかから、人格高潔で体力に優れ、かつ頭脳明晰であると所属部隊長から認められなければならないかった。試験は学力試験の初審と教官面接の再審に分かれ、合格率一〇パーセントという超難関であった。これを突破して合格した陸大生は、陸軍でのエリート中のエリートと認められた。

陸大は参謀本部での作戦の立案や、各部隊で司令官をサポートする参謀を養成する機関で、三年の修学期間の間に、戦術、戦史、参謀要務の三つがおもに教育された。

戦術教育では、多くの想定課題を解くことで、参謀にとって必要な情勢判断とそれに適切に対処する能力を養った。陸大の全教育期間の半分がこれに費やされた。戦史教育では、

古代からの戦史を通して、作戦や戦闘の原理原則を学んだ。参謀要務では、参謀として勤務するうえで必要な軍事に関する諸制度や実務の基本を習った。

これら陸大の教育のもととなったのが、ドイツから招聘しょうへいされたメッケル少佐によってもたらされたドイツ陸軍式の教育であった。

日本陸軍は創建当初、教育を含めた軍制の根本をフランス陸軍から取っていた。これは、日本陸軍の基礎を作った山県有朋、大山巖おおよまいわ、西郷従道さいごうじゅうみちらがいずれも明治時代初めにフランスへ留学し、当時ヨーロッパを席卷していたフランス陸軍の兵式や戦術を学んだことによる。

しかし、一八七〇（明治三）年から通算六年間、フランスとドイツに留学し、ヨーロッパの情勢と軍制を学んだ長州出身の桂太郎は、一八七一（明治四）年の普仏戦争でフランスを破ったドイツ（プロイセン）の軍制を採用すべきであるという意見を大山に進言した。大山ははじめ桂の意見に難色を示していたが、結局、桂の意見を採用し、一八八五（明治一八）年、陸大教官として、ドイツ陸軍からクレメンス・メッケル少佐を招いた。

陸大教官となったメッケルは、日本に滞在した三年（四年とも）の間に陸大の教育を改革し、戦術中心で、かつ参謀演習と呼ばれる現地に赴いての戦術教育を基礎とする実践的な

教育法に改めた。陸大教育の半分が戦術教育なのは、このメツケルの教育方針に基づいていた。

メツケルの戦術教育の特徴をふたつあげると、ひとつは、精神力の鍛錬を重視したことである。メツケルは、たとえ新鋭の兵器が誕生しても、それに依存することは危険であり、最終的には精神力が勝敗を決めると説いた。もうひとつは、防御よりも攻撃を優先したことである。メツケルは、いかなる防御施設も必ず弱点があり、多少の犠牲を払ってでもその弱点を攻撃し、分散展開して敵の背後を突くべきであると主張した（上法1973）。

このメツケルが作り上げた陸大教育は、まだ兵器が発展途上で白兵戦が中心であった日清・日露両大戦までは大いに効力を発揮した。しかし、時代が進み、アジア太平洋戦争が始まると、この陸大教育は、圧倒的な国力と技術力を誇る英米ソを前に、悲劇的な結果を生んだ。戦時中、参謀本部で作戦課員などを務めた高山信武たかやましのぶは、この陸大の精神力偏重の教育を次のように批判した（高山1981）。

精神力が戦勝の重大要素であることは言を待たないが、強大な物力の前には限界があることを忘れてはならない。もとより日本の国力、資源、予算等が根本をなし

たのであるが、これらを総合して戦力を向上せしめ、物心一体の兵法を指導育成すべきであったであろう。

このような陸軍の精神教育を牟田口が受けていたということは、後の牟田口の行動をみていくうえで、考慮すべき点であろう。

陸大から参謀本部へ

当時、長州閥が士官学校の教育に大きな力を及ぼしたことは前述した。この状況は陸大でも変わらなかった。陸大の入学試験で長州出身者が他県出身者よりもよい成績が取れるよう、同じ長州出身の先輩将校が、事前に彼らのために受験対策をしたり、教官にそれとなく働きかけたりした。そのため、長州出身者は、成績が芳しくなくても落第することなく天保銭組として陸大を卒業した。

これに対し、長州以外の出身者は、自らの実力で陸大に入学し、優位に立つ長州出身者を横目に、参謀となるための知識と技能を必死に磨いていった（上法1973）。その努力の結果は、卒業時の成績となって表れた。

一九一七（大正六）年一月、牟田口ら陸大第二九期生五七人が卒業した。このうち、天皇から恩賜品の軍刀を授かることができた成績上位六人の出身を首席から順にみると、井出宣時いのぶときは東京、町尻量基まちしりかずもとは京都、渡辺右文は熊本、木下敏は和歌山、和田盈は岡山、常岡寛治は兵庫と、長州閥系の岡山を除いて、長州以外の出身者で占められた。

一方、牟田口の成績は、第二九期のなかの真ん中よりやや上の二五位であった。成績はごく平凡で、決して目立つ存在でもなかった。それでも、牟田口は陸大卒業後、船舶を使った陸軍輸送計画や戦時での船舶の徴発を担当する参謀本部運輸課船舶班に配属され、エリート参謀としての人生をスタートさせた。

新たな国際秩序の形成

牟田口が参謀本部で勤務を始めた頃、世界は激動の時代を迎えていた。牟田口が陸大を卒業した同じ月、ロシアでソビエトでボリシェヴィキを率いたウラジーミル・レーニンは、武装蜂起し、世界初の社会主義政権（ソビエト政権）を発足させた。レーニンは、すぐさま第一次世界大戦の全交戦国に向けて、即時休戦と無賠償、無併合、民族自決の原則に基づいた講和の成立を求めた。しかし、この求めに連合国側が応じなかったため、ソビエト政

権は、一九一八（大正七）年三月、同盟国側と単独で講和条約を結び、連合国から離脱した。ソビエトと対立した連合国側諸国は、革命の影響が世界に広がることを懸念し、同年夏、ロシア革命でシベリアに取り残されたチエコスロバキア兵の救出を名目に対ソ干渉戦争を起こした。このとき、日本も同盟国のイギリスからの要請に応じ、七万人余りの将兵をシベリアに送った（シベリア出兵）。

第一次世界大戦のさなかの、一九一八年一月八日、アメリカのウッドロウ・ウィルソン大統領は、議会演説のなかで、一四ヶ条からなる平和綱領を発表した。このなかで、ウィルソンはこれまで紛争の火種ともなった列強間の秘密条約の廃止や、平等な通商関係の構築のほか、軍縮、民族自決、国際平和機構の創設など、第一次世界大戦後の平和的な国際秩序のあり方を全世界に向けて提唱した。

第一次世界大戦終結後の一九一九（大正八）年一月に開催されたパリ講和会議では、ウィルソンの平和綱領のうち、国際平和機構の国際連盟の創設は採用された。しかし、民族自決については、植民地を手放したくない連合国側の思惑により、不十分なままに終わった。民族自決を認められなかった朝鮮では三・一独立運動、中国では五・四運動が発生した。

また、同年六月に連合国とドイツとの間で結ばれたヴェルサイユ講和条約では、ドイツ

に天文学的金額の賠償金や、全植民地の放棄、軍備の制限など、将来に禍根を残すようなきわめて厳しい要求を課した。

ウィルソンの提唱のひとつだった軍縮は、一九二〇年代に入ってから本格的に進んだ。総力戦となった第一次世界大戦で軍備を拡張した交戦諸国は、戦後、膨れ上がった軍事予算の処理に頭を悩ませた。そのなかにあつて、世界一の経済力を誇ったアメリカは、中国への経済進出を加速させるため、そのライバルである日本の軍事力を弱めたいと考えていた。

これら意図のもと、一九二一（大正一〇）年一月一二日からワシントンで開かれた海軍軍縮会議で、アメリカは、日本・イギリス・フランスとともに、四ヶ国条約を締結した。この条約は、太平洋の島々にある権利の維持と、それらをめぐる紛争を話し合いで解決すると取り決めたものであつた。そして、この条約と引き換えに、一九〇二（明治三五）年から続いていた日英同盟が破棄された。日本にとって、日英同盟を失うことは軍事的に大きな痛手であつた。

さらに、会議では海軍軍縮条約と九ヶ国条約が成立した。前者は戦艦や航空母艦などの主力艦の保有トン数とその比率を定めたもので、アメリカとイギリスの比率がそれぞれ五

に対し、日本の比率は三とされた。これにより、日本の海軍力は大きく削減されることになった。

後者はアメリカ・イギリス・日本・フランス・イタリア・中国・ベルギー・オランダ・ポルトガルの九ヶ国が中国の主権の尊重と領土の保全、中国に対する門戸開放と機会均等を約束した条約であった。この九ヶ国条約により、日本は第一次世界大戦で手に入れた山東省の旧ドイツ権益の大半を中国に返還した。

パリ講和会議とワシントン海軍軍縮会議により、第一次世界大戦後のヨーロッパとアジア太平洋の新たな国際秩序、いわゆるヴェルサイユワシントン体制が形成された。

軍縮と軍人忌避の時代

一九二二年八月、ワシントン海軍軍縮条約が発効され、日本海軍が主力艦の破棄や艦船の建造中止を断行すると、軍縮を求める動きは日本陸軍にも及んだ。同年、帝国議会の要求を受けて、やまなしはんぞう山梨半造陸相は、将兵約六万人の人員整理を柱とする軍縮を二回にわたって実施した。

さらに、一九二五年のうがきかずしげ宇垣一成陸相による軍縮では、四個（十三、十五、十七、十八）師団

が廃止された。その一方で、宇垣は軍縮で出た余剰金を軍備の近代化に充てた。さらに、宇垣は教育機関で軍事教練を指導する配属将校を創設し、人員整理で軍を退いた将兵の再就職先とした。軍縮を成功させた宇垣は、以後、政治力を持った陸軍の実力者としてのし上がっていった。

しかし、三回に及ぶ陸軍軍縮は、将兵の出世の道を閉ざし、軍としての士気を否応なく低下させた。また、それだけでなく、当時、軍人に対する日本国民の風当たりはきわめて厳しかった。

第一次世界大戦のさなか、世界的なデモクラシーの機運の高まりを受け、日本でも大正デモクラシーと呼ばれる民主主義を求める動きが起きた。このデモクラシー思想を日本に普及させたのが、東京帝大法科教授の吉野^{よしの}作造^{さくぞう}であった。

吉野は一九一六年一月に雑誌『中央公論』で発表した論文で、天皇を主権者とする明治憲法がある以上、国民主権は主張できず、デモクラシーの訳語を民主主義とすることは不適切であるとして、民本主義ということばを当てはめた。吉野は、民本主義の目標を一般国民の幸福の増進と、国民の意思に基づく政治の実現であると説き、そのためには、言論の自由や選挙権の拡大、政党内閣制の実現が必要であると主張した（伊藤2002）。

民本主義に共鳴した日本国民は、国民の意思に反して政治を壟断する薩長土肥出身の藩閥政治家、官僚、軍人を批判し、国民の意見が反映された議会の運営と、普通選挙の実施を求めた。

牟田口と同じ佐賀出身で、陸軍では二期後輩にあたる土橋勇逸つちはしゆういつは、当時の軍人の置かれた状況を、後年、次のように述べている（土橋1985）。

反軍思想は社会の各界に現われ出し、政治家、一般言論界においては、反軍の言動が盛んに報ぜられ、今日は何々新聞が軍部非難の記事を掲げたの、だれだれが何とかいう集会あるいは講演会で反軍の演説を行ったといつて、われわれを憤慨させたものである。

そうかと思うと某少佐がある集会でだれかに面罵されたとか、甚だしきに至つては某大尉が満員電車から降りるべく、人を押し分けながら通つたとき、靴の拍車が労働者風の男のズボンに引っかかつたとかで、その男にぶん殴られたとかの情報が舞い込んで来たりした。

われわれは涙を飲まんばかりにして、臥薪嘗胆がしんしょうたんを誓い合つたものである。

であるから、このままではいけない。なんとかせねばならないというのは、独り若い少・中尉に限ったことではなく、中央部にあった少・中佐の間にも起こった。

陸軍軍人にとって、大正時代は世間から忌避される、まさに冬の時代であった。そして、「このままではいけない」と考えた陸軍軍人たちは何をしたのか。そして、そこに牟田口はどう関わったのか。

一夕会の結成

一九二九（昭和四年）五月、陸軍少壮幕僚（陸軍中央の各部局や各部隊司令部などに勤務する将校のこと）らで組織された二葉会と木曜会が合流し、一夕会が結成された。

二葉会は一九二七年、陸士第一六期で、東京麻布歩兵第三連隊長の永田鉄山大佐を中心ながた てつざんに作られたグループで、河本大作こうもと だいさく、山岡重厚やまおか しげあつ、板垣征四郎いたがき せいしろう、土肥原賢二どい はらけんじ、東條英機とうじょう ひろむね、山下奉文やまもと ともゆきら陸士第一五期から第一八期の将校二〇人ほどが参加した。木曜会は、二葉会が成立してからもなくの同年秋、軍装備や国防方針などの研究を目的に、参謀本部作戦課員の鈴木貞一少佐らによって組織された。木曜会の会員には、永田、東條のほか、石原莞爾いしはら かんじ、

根本博^{ねもとひろし}、土橋勇逸、そして、牟田口廉也ら陸士第二二期から第二四期の将校らがいた（川田2010）。

牟田口は陸大を卒業してから、二年近く参謀本部に勤務し、その後、近衛歩兵第四聯隊長に任じられた。近衛聯隊は、天皇ならびに皇族の護衛をおもな任務とし、同聯隊には、全国から思想、家庭、財産、教養、体質のいずれもが優れた兵が集められた（近衛歩兵第四聯隊史編纂委員会1981）。その聯隊を率いる聯隊長も、当然、資質が優れていなければならず、着任したとなれば、その栄誉は計り知れないほど大きなものであった。

近衛聯隊長を勤めあげた牟田口は、木曜会が結成される直前の一九二七（昭和二）年五月、陸軍省軍事課に配属された。軍事課は、陸軍の予算編成を担当する部署で、参謀本部作戦課ならびに編制動員課とともに、陸軍エリート参謀の花形といわれたポストであった（木戸日記研究会1982）。

一夕会の会合に出席した土橋によると、同会の目的は、①陸軍人事を公正なものにし、陸軍の重要ポストにこのグループのメンバーを送り込む、②満洲問題を解決する、③このグループで林銑十^{はやしせんじゅうろう}郎（石川出身、陸士第八期、陸大校長）、荒木貞夫^{あらかさだお}（東京出身、陸士第九期、参謀本部第一部長）、真崎甚三郎（陸士第九期、第八師団長）を盛り立てて、国策を強力に推し進め

る、という三点にあった（土橋1985）。

なぜ、一夕会は結成されたのか。一夕会の中心となったのが、永田とその同期の小畑敏四郎^{しろう}、岡村寧次^{おかむらやすすじ}であった。陸士第一六期は、人材が粒ぞろいで、「花の第一六期」といわれた。特に永田、小畑、岡村の三人に対する期待は高く、「陸軍の三羽鳥^{さんば}」と呼ばれた。

永田と岡村は東京陸軍地方幼年学校で、小畑と岡村は東京中央幼年学校でそれぞれ同期の間柄であった。永田、小畑、岡村の三人は、いずれも心を許す仲で、その関係は陸大を出て将校となってからも続いた（岡村1970）。

永田ら陸士第一六期が陸軍参謀として勤務を始めた明治末年から大正初年にかけて、陸軍の実権は長州閥に握られていた。陸軍大臣を一九〇二（明治三五）年から一九一一（明治四四）年まで九年間も続けた寺内正毅は、在任中、長州閥と対立した将校を次々と陸軍から追いやった。

代表的な例として、岩手出身の東條英教^{とうじょうひでのり}中將は、陸大第一期首席というエリートで、薩摩閥の将校と親しくしていた。東條の存在が目障りであった寺内は、陸軍人事に働きかけ、東條を参謀本部の役職から地方の旅団長に遠ざけ、さらに、指揮能力が足りないとの理由で、東條を予備役（現役を退くこと）とした。東條英教の長男である東條英機は、寺内

の父に対する行為を恨み、後に陸軍の要職に就くと、長州出身の将校に辛い仕打ちをした（今西1975）。

また、陸軍の逸材とされた宇都宮太郎が、陸軍トップの三長官（陸軍大臣、参謀総長、教育總監）のどれにもなれなかつたのも、長州閥がその道を阻んだといわれる（同右）。

長州閥でない永田ら三人は、このような長州閥の陸軍支配に憤りを感じるとともに、世界的なデモクラシーの風潮のなかで、国民の意思が反映されない陸軍の体質を改めるべきであると思いついた。

一九二一（大正一〇）年一〇月末、ヨーロッパに出張した岡村は、ドイツ南部の温泉保養地、バーデン＝バーデンでスウェーデン駐在の永田と、駐ロシア日本大使館附武官の小畑と再会し、帰国後に同期や後輩から同志を募ってグループを作り、進退を賭けて陸軍の改革に乗り出すことを誓い合った（稲葉1970）。この盟約により結成されたのが、二葉会、そして、一夕会であった。

一夕会ができあがって以後、永田が歩兵第三連隊長から陸軍省軍務局で予算編成を担当する軍事課長に、岡村が参謀本部第四部内国戦史課長から陸軍省人事局補任課長にそれぞれ進み、着実に陸軍中央で地歩を固めていった。

陸軍の改革を旗印に結集した一夕会を、牟田口はどのような目で見ていたのかははつきりしない。しかし、長州閥が陸軍を支配し続ける限り、佐賀閥の牟田口はいつその立場を追われてもおかしくなかった。陸軍中央で順調に出世したとはいえ、牟田口にとつても、陸軍が一夕会によって改革されるほうが都合よかった。

満洲情勢の緊迫化

一夕会が結成された目的のひとつに、満洲問題の解決があった。満洲は現在の中国東北部にあたり、清朝を成立させた満洲人（女真人）の故地とされる。満洲の地名の由来は諸説あるが、満洲人が文殊菩薩を信仰していたことからつけられたといわれる。

日露戦争を戦った日本は、一九〇五（明治三八）年九月、ポーツマス講和条約で、ロシアが保持していた旅順、大連のある遼東半島南部の租借権と、長春以南の東清鉄道支線の権利を手に入れた。日本は、一九〇六（明治三九）年九月、遼東半島南部の租借地を統治する関東都督府（後の関東庁、関東州庁）を設置し、同年十一月に東清鉄道支線ならびにその関連企業を経営する南満洲鉄道株式会社（満鉄）を創設した。

満鉄沿線には、鉄道を警備する関東都督府管下の守備隊が配備された。一九一九年、守

備隊は関東都督府の改組により、天皇直隸の関東軍として独立した。

満洲には、石炭や鉄鉱石など天然資源が埋蔵されていたほか、大豆が主要農作物として豊富に収穫された。日本は、それら資源を原料のまま、あるいは加工して鉄道で運搬し、港湾のある大連や営口から船で日本やヨーロッパに輸出した。資源の乏しい日本にとって、満洲は貴重な資源供給地となった。

奉天省（現遼寧省）海城出身の張作霖は、日露戦争で部下を率いて日本軍に協力した。中華民国成立後、張作霖が満洲の実力者として頭角を現すと、日本は張作霖を支援して、日本の満洲權益を保護した。張作霖は部下をまとめて奉天軍閥を形成し、一九一七年、満洲の独立を宣言した。

一九二〇年代前半、中国は国際的に承認された正統政権の北京政府に対し、中国国民党の孫文を指導者とする広東軍政府が「国民革命」を掲げて中国統一を目指していた。

たびたび、北京政界への進出を狙っていた張作霖は、一九二四年九月、元北京政府國務總理の段祺瑞が率いる安徽軍閥と広東軍政府とで反直三角軍事同盟を結成し、北京政府を支配していた直隸軍閥を攻撃した（第二次奉直戦争）。

戦いは、直隸軍閥第三軍総司令の馮玉祥が北京でクーデターを起こし、大總統で直隸

軍閥リーダーの曹錕そうこんを捕らえたことで奉天軍閥の勝利に終わった。張作霖は段祺瑞を臨時執政に就けて、北京政府を事実上支配した。

北京政界の権力を握った張作霖は、自らを統制下に入れようとする日本と距離を置き始めた。これに対し、日本側も勝手な振る舞いをする張作霖を疎ましく思うようになった。

一方、一九二五年三月一二日に亡くなった孫文の遺志を受け継いだ蔣介石しょうかいせきは、一九二六年七月、中国国民党の軍隊である国民革命軍を率いて、中国統一の北伐戦争を開始した。蔣介石は北伐途上の一九二七年四月一二日、上海で中国共産党員を弾圧し、一九二四年一月から続いた中国共産党との第一次国共合作を崩壊させた。そして、同月、蔣介石は南京に自らを事実上の指導者とする南京国民政府を樹立した。

一九二七年五月、国民革命軍が山東省に迫ると、「積極外交」を掲げた日本の田中義一たなかぎいち内閣は、日本人居留民の保護を名目に山東省へ陸軍部隊を派遣した（第一次山東出兵）。しかし、このときは国民革命軍が北伐をいちじ中止したため、本格的衝突には至らなかった。

外相を兼任した田中は、前外相で協調外交を主導した幣原喜重郎しではらきじゅうろうとは反対に、中国に対して強硬な態度をとることで、「積極外交」という自らの外交姿勢を示そうとした（中村1

96頁）。

同年六月二七日から七月七日にかけて、田中は外務大臣官邸で、関係各省の代表者らを集めて、「東方会議」を開催した。会議では、日本の満蒙（満洲と東部内蒙古を含む地域）權益の確保を政策の主眼とすることが確認された。そして、中国の動乱で日本の満蒙權益が脅かされた場合には、必要に応じて断固とした措置をとることが宣言された。

この「東方会議」では、日本が満洲を領土に組み込み、東アジアに武力侵攻をするという旨の「田中上奏文」が作成されたといわれた。しかし、現在、この文書は偽作であったことがわかつている。

一九二八年四月、北伐戦争が再開されると、田中内閣は再び山東省に陸軍部隊を派遣（第二次山東出兵）し、五月三日、済南で大規模な軍事衝突を起こした（済南事件）。

日本軍の妨害を乗り越えた国民革命軍は、六月八日、北京を占領し、孫文の悲願であった北京政府の打倒を達成した。

この四日前の六月四日、北伐戦争に敗れた張作霖が本拠地の奉天に鉄道で逃れていたところ、奉天目の皇姑屯で線路に仕掛けてあった爆弾によって殺害された。張作霖の暗殺を実行した関東軍高級参謀の河本大佐（こもただいざく）は、すでに関東軍にとって邪魔者となっていた張作霖を殺害して、これを口実に満洲で武力発動する計画であった（江口1989）。しか

し、その試みは準備不足のため不発に終わった。

田中内閣は、関東軍が実行した張作霖爆殺事件を、当初、「満洲某重大事件」として公表を避けた。しかし、田中は事件の真相を知った天皇から叱責を受け、責任を取って内閣を総辞職させた。

張作霖の後を継いだ息子の張^{ちやうがくりやう}学良は、国民政府に従うことを宣言するとともに、日本との対決姿勢を鮮明にし、日本の満洲權益を脅かした。

永田は以前から第一次世界大戦の総力戦について研究し、日本が自給自足体制になった場合の資源供給地としての満洲に注目していた。そのため、北伐戦争や張作霖・学良親子によって日本の満洲權益が危険にさらされていることを問題視した。

一方、鈴木貞一は、満洲を日本の過剰な人口のはけ口として、また、ソ連に対する国防の観点から重要とみていた（日本近代史料研究会1971）。

永田の二葉会も鈴木の木曜会もどちらも満洲問題の解決を目指していて、その彼らの共通の願いが一夕会の結成の目的のひとつに掲げられた。

桜会とふたつのクーデター未遂

一九三〇年八月、駐トルコ日本公使館附武官であった橋本欣五郎はしもときんご中佐が、参謀本部第二部欧米課ロシア班長に任じられた。

橋本は、一八九〇年二月、岡山県に生まれ、熊幼、中幼をへて、一九一一年、第二三期生として陸軍士官学校を卒業した。牟田口にとって橋本は、熊幼時代からの一期下の後輩にあたった。

橋本は、陸大でロシア軍制史を専攻し、ロシア語とフランス語を得意とした。陸大卒業後、橋本はロシア通の将校として、ハルピン特務機関員や、満洲里特務機関長を務め、ロシア側特務機関員と接触してロシア革命の研究を行った。そして、一九二七年九月、トルコ公使館附武官に転じると、トルコ建国の父のケマルケマルハパシヤハパシヤ（ムスタファハケマルハアタチユルク）に私淑してトルコ革命の研究に没頭した。

トルコ革命は、一九一九年、第一次世界大戦に敗れたオスマン帝国のなかで起きた独立国家樹立運動をいう。トルコ民族の主権と連合国に奪われた領土の回復を目指したケマルハパシヤ率いる大国民議会は、ギリシア軍との戦いに勝利し、一九二三年、トルコ共和国を樹立して、オスマン帝国を滅亡させた。

日本政治の腐敗に不満を持っていた橋本は、トルコ革命を参考に日本で国家改造を实行しようとした。この頃、日本で騒動となっていた統帥権干犯問題は、橋本の決意をさらに固くした。

統帥権干犯問題とは、一九三〇（昭和五）年、濱口雄幸内閣が海軍軍令部の承認なしに、日本海軍の兵力量を定めたロンドン海軍軍縮条約に調印したことに端を発した。海軍軍令部長の加藤寛治大将を中心とする軍縮条約反対派は、天皇が持つ軍の統帥権を拡大解釈し、条約調印が統帥権を犯すものであると強く抗議し、日本政界を混乱させた。

橋本は、国家改造を目指し、一九三〇年七月、陸軍中央に勤務する尉官、佐官級将校を中心に同志を募って桜会を結成した。

橋本によると、はじめに同志として名乗りをあげたのは、参謀本部支那課員で、熊幼時代から橋本の後輩にあたる長勇中佐、ロシア通の若手将校の天野勇大尉ら数名であった（中野1963）。

一方、橋本の同志のひとりであった田中清少佐によると、桜会の発起人は、橋本と陸軍省軍事調査部調査課長の坂田義朗中佐、橋本と同じくロシア通で、東京警備司令附を務めていた樋口季一郎中佐ら十数人であった（今西1975）。樋口は日中戦争勃発後、ナチスの

迫害を受けて満洲に逃れてきたユダヤ人を保護したことで知られる。

桜会結成時の会員数は九六人（同右）。一九三一年二月までに桜会の会員数は五〇人余りとも（「中野1963」）で、そのうちの四割が参謀本部で勤務していた参謀らであった。また、会員のなかに長州出身者はほんのわずかで、桜会が一夕会と同様、反長州閥で形成されていた。

その桜会の会員のなかに、前年八月に参謀本部員に転じていた牟田口の名があった。牟田口がどのような経緯で桜会の会員になったのかはわからないが、牟田口と同じく桜会の会員になった土橋勇逸によると、桜会の会員は、橋本らが「勝手に決めた顔振れ」（土橋1985）であったという。

会員にされた土橋は、桜会の結成式に参加したとき、桜会が一夕会と異なり、クーデターという非法手段で国家改造を試みようとしていることを知った。土橋は、陸軍の革新には賛成だが、クーデターをすることには絶対に反対であると批判し、会員になることを辞退しその場を後にした（同右）。参謀本部作戦課員の河邊虎四郎少佐も結成メンバーのひとりであった。しかし、数ヶ月して、会の内情が当初と異なってきたため、河邊は橋本らと距離を置いた（河辺1979）。

桜会から次々と離れていく将校に対し、橋本は「茲こゝに於て予は将来国家改造の重大事を

決行するに殆ど頼むに足らずと判断す。抑々陸大出身者は時勢に迎合する出世病者大部を占むるが当時の通弊なりき」(中野1963)と批判した。

桜会は一九三一年に三月事件と十月事件というふたつのクーデター未遂騒ぎを起こした。前者は、同年三月、当時の宇垣陸相を擁立して軍部独裁政権を成立させ、国家改造を断行するという計画であった。これには、宇垣本人、ならびに宇垣と関係が近い陸軍次官の杉山元やまはじめ、中将や、陸軍省軍務局長の小磯国昭こいそくにあき中將からも密かに了承していた。しかし、クーデター決行直前になって、宇垣が実行をためらったため、未遂に終わった。

後者は、同年一〇月、前月に起きた満洲事変に呼应して、改めて国家改造を実現しようという意図から計画された。満洲事変は満洲の領有を狙う関東軍参謀の石原莞爾中佐らの計画に基づいて実行された軍事クーデターで、一九三二(昭和七)年三月、清朝最後の皇帝溥儀ふぎを首班とする傀儡政権の満洲国が成立した。

十月事件で、橋本は若手将校から人気のある教育總監部本部長の荒木貞夫中將を担ぎ出そうとした。しかし、荒木は橋本らの計画に乗らず、再びクーデターは未遂に終わった。

ふたつのクーデター未遂により、橋本ら桜会関係者は責任を取って処罰され、桜会も解散された。しかし、このとき、事件への関与が不明な牟田口に嫌疑がかけられることはな

かった。一九三三（昭和八）年一二月、牟田口は軍の文書を取り扱う庶務課長に進んだ。

皇道派と統制派の対立

永田や岡村とともに一夕会を結成した小畑敏四郎は、一八八五年、高知県に生まれた。小畑は、陸軍の作戦立案に長け、「作戦の鬼」の異名を持っていた。また、第一次世界大戦でロシア軍に従軍した経験を持つ陸軍きつてのロシア通でもあった。その性格は独善的であり、かつ頑固であったという。これに対し、永田は深謀遠慮な性格で、協調性を重んじていた。

岡村によると、若い頃から同志の間柄にあった永田と小畑は、小畑が参謀本部作戦課長に就いた一九三二年頃から「公務上の折衝もあり、部下課員の意見の衝突に連れられたこともあり、重点直行主義の小畑と、良識主義の永田との性格上の差異も暴露してきて」（稲葉1970）、ふたりが反目しあうようになった。「部下課員の意見の衝突」のひとつは、前述した小畑の愛弟子の鈴木率道と永田と親しくした東條英機との対立であった（鈴木1984）。

ロシア通の小畑は、対ソ防衛のため、中国との対決はできるだけ避けようとした。一方、

永田は国家総動員の観点から資源のある中国に強硬的な態度で臨もうとした。そのような、中国に対する考え方の違いも、ふたりの関係を悪化させる原因となった。

この永田と小畑の対立を契機に、一夕会は事実上、二派に分かれた。ひとつは永田らの統制派、もうひとつは小畑らの皇道派であった。皇道派という名前の由来は、同派に属した荒木貞夫が陸軍のことを天皇の股肱ここうの臣（信頼のおける臣下）であるという意味の「皇軍」と呼んでいたことによる（有末1968）。これに対し、統制派は陸軍の組織統制を重んじたことから名づけられた。しかし、永田軍事課長の部下を務めた綾部橘樹あやべ きつきによると、皇道派はあつても、統制派という派閥はそもそも存在せず、永田のような信頼のおける人物に目を向けていた程度のつながりだったという（綾部1968）。ここでは、ひとまず統制派を派閥として扱う。

一夕会から分かれた両派閥は、どちらも陸軍改革を目指すことに変わりはなかった。前者は林銑十郎、後者は荒木貞夫と真崎甚三郎と結びつきを強めた。このとき、林は教育總監、荒木は陸相、真崎は参謀次長をそれぞれ務めていた。

荒木・真崎と小畑との関係を表すエピソードをひとつあげると、作戦課長の小畑は軍機に関する重要電報が入ると、直属の上司の古荘幹郎ふるしょうもとお第一部長に見せる前に荒木と真崎に回

覧し指示を仰いだ。これは参謀本部の組織を乱す行為で、後にいくら古荘が異議を唱えても、立場が上の荒木と真崎の方針を覆すことはできなかった（高宮1971）。

皇道派は、小畑や真崎と同じ、高知と佐賀出身の将校を中心に形成された。牟田口もそのひとりであった。この頃の真崎の日記を見ると、真崎のもとにたびたび報告に訪れる牟田口の姿を確認することができる（伊藤1981）。

統制派のひとりで、後にインパール作戦で無謀な作戦を強いる軍司令官の牟田口と対立した佐藤幸徳は、戦後の回想で彼が牟田口から受けた妨害について語った。それによると、一九三五年夏、佐藤は広島歩兵第十一聯隊附から陸軍省人事局課員に転補するとの内達を受けた。しかし、人事が確定する直前、佐藤は突如として熊本第六師団の作戦参謀に異動を命じられた。佐藤は、この左遷的人事が陸軍中央を牛耳る皇道派によるものであるとみた。

作戦参謀着任後、佐藤の行動が何者かによってなぜか陸軍省に報告されたり、佐藤が同じく統制派の東條英機少将（当時久留米第二十四旅団長）とともに皇道派に対抗しようと考えを練っていると、佐藤と東條が会談をしているとの旨の情報が陸軍省に届けられたりした。佐藤の行動を逐一監視していたのは、佐藤が作戦参謀になってすぐに次級参謀に就いた

部下の中佐で、その中佐と連絡を取り合っていたのが、牟田口であった。佐藤と牟田口は、佐藤が参謀本部に勤務していた一九三〇年頃、桜会に関する問題をめぐって激論を闘わしたことがあり、それ以来、二人の関係は悪化した（高木1966）。

牟田口は、陸軍中央にいる立場を利用して、皇道派の勢力拡大と、統制派の追い落としに直接関与していた。

二・二六事件と陸軍中央からの「左遷」

日本陸軍には、毎年三月、八月、一二月に定期的な人事異動があった。この人事異動の内容は、そのときの陸軍中央内の力関係が強く反映された。

一九三二年八月の荒木陸相のもとでの陸軍定期異動で、陸軍省ナンバー2の陸軍次官に佐賀閥で皇道派の柳川平助中將やながわへいすけが就いた。そして、関東軍司令官にも同じく佐賀閥の武藤信義大將が着任した。すでに、このときまでに軍務局長に高知出身の山岡重厚少将、山岡の部下の軍事課長に同じく高知出身の山下奉文大佐、参謀次長に真崎、参謀本部第三部長に小畑など、皇道派が陸軍中央の主要ポストを独占していた。

一方、統制派は永田が参謀本部第二部長、磯谷廉介大佐いそがけんすけが岡村の後任で人事局補任課長

などをそれぞれ務めていたが、圧倒的な皇道派の勢いに押されていた。

この皇道派優位の状況に変化が現れたのは、一九三四（昭和九）年一月、病により辞任した荒木に代わって、教育総監の林銑十郎大將が陸相に任じられてからであった。空席となつた教育総監には真崎が選ばれ、林を補佐する軍務局長には永田が抜擢された。その後まもなくして、陸軍中央を占めていた山岡や柳川ら皇道派が次々とその職を逐われた。林がこのような思い切つた人事をしたのは、皇道派を快く思つていなかつた参謀総長の閑院宮かんいんのみや載仁元帥ことひとの意向を受けたことによるといわれる（藤井2015）。

さらに、一九三五年七月、林は異動人事をめぐる問題から、真崎を教育総監の職から更迭し、名誉職の軍事参議官に任じた。陸相が陸軍トップ3の一角の教育総監を更迭することとは、前代未聞の事態であつた。

このような、統制派の陸軍人事に不満を抱いた皇道派の相沢三郎あいざわさぶろう中佐は、八月二二日、陸軍省の軍務局長室に押し入り、執務中の永田を刺殺した。相沢は同志から統制派の一連の動きの中心に永田がいると聞かされていて、個人的に恨みを募らせていた（高宮1971）。なお、相沢は牟田口と同じ陸士第二期生であつた。

しかし、統制派のリーダーであつた永田が亡くなつたとはいえ、それがすぐに皇道派の

復活に繋がったわけではなかった。同年一二月の陸軍定期異動で、東京の第一師団長を務めていた柳川が、台湾軍司令官に転出された。第一師団は皇道派青年将校の牙城といわれていた。その第一師団も一九三六年二月、満洲へ派遣されることが決まった。この措置は、皇道派を陸軍中央から遠ざける狙いがあった。これに危機感を抱いた皇道派青年将校らは、秘密裏に計画をしていた軍事クーデターを強行した(二・二六事件)。

二月二六日早朝、第一師団管下の東京赤坂歩兵第一聯隊、麻布歩兵第三聯隊、近衛歩兵第三聯隊の兵約一五〇〇人が首相官邸や主要閣僚の私邸を襲い、斎藤実内大臣・高橋是清蔵相・渡辺錠太郎教育総監らを殺害し、鈴木貫太郎侍従長に重傷を負わせた。さらに、反乱部隊は陸軍省や警視庁なども押さえ、日本の政治の中枢である永田町を占拠した。

陸相官邸に押し入った青年将校らは、応対した川島義之陸相に対し、「決起趣意書」を読み上げた。趣意書には、昭和天皇のもとでの日本の国体を破壊しているのは、元老・重臣・軍閥・財閥・官僚・政党などであり、これらを打倒して「維新」を達成しなければ、国体は維持できないという旨の内容が記されていた。青年将校らは、趣意書を受けて、昭和天皇から「維新」の詔が渙発され、真崎への大命降下と暫定内閣の組閣というストーリーを描いていた(江口1986)。

事態を受けて、午前八時半、陸相官邸に真崎をはじめとする全軍事参議官、参謀次長の杉山元中将、東京警備司令官の香椎浩平中将、侍従武官長の本庄繁大将が集まって対策を協議し、反乱部隊を討伐しないことで意見を合わせた。

午前一〇時過ぎ、真崎は加藤寛治海軍大将とともに、皇族で海軍軍令部総長の伏見宮博恭邸を訪問した。真崎は伏見宮に対し、昭和天皇の大詔渙発による強力な新内閣の誕生を求めた。その後、伏見宮は天皇に拝謁し、新内閣の組閣などを進言したが、天皇は伏見宮の意見を冷たく突き放したという（田崎1977）。この時点で、真崎や皇道派青年将校が求めた新内閣発足による「維新」断行は実現不可能となった。それからまもなくして参内した川島に対し、天皇は速やかに反乱部隊を鎮圧する方法を検討するよう命じた。

反乱部隊によって信頼する重臣を殺害されたことに対する天皇の怒りは激しく、本庄侍従武官長をたびたび呼び出してはクーデターの鎮圧を催促した。

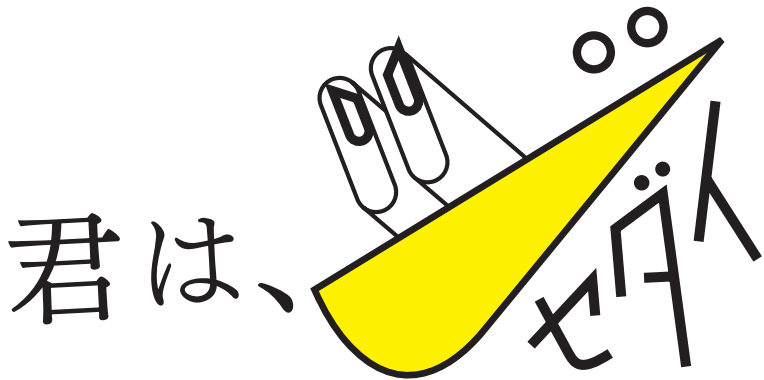
二八日、天皇は反乱部隊に対し、原隊に復帰するよう命じ、第一師団を鎮圧に向かわせた。陸軍は、ピラや拡声器を使って、反乱部隊に投降を促した。その結果、二九日午後、反乱部隊を率いた青年将校らは逮捕され、反乱部隊の兵もそれぞれ原隊に戻った。三日あまりに及んだ未曾有のクーデターは失敗に終わった。

三月五日、二・二六事件で倒れた岡田啓介内閣に代わって、前外相の広田弘毅ひろた こうぎに組閣の大命が下りると、陸軍は「肅軍」と称して、クーデターを主導した青年将校らを軍法会議にかけて処罰した。さらに、陸軍大将のうち、軍事参議官の真崎、荒木、林銑十郎、阿部あべ信行のぶゆき、ならびに本庄と香椎が事件の責任をとって予備役に編入され、依然として陸軍中央の職にあった皇道派将校も、軒並み前線の在外部隊に異動させられた。たとえば、決起した青年将校に同情的とされた陸軍省軍事調査部長の山下奉文少将は、朝鮮龍山の歩兵第四十旅団長に転補された。

山下はクーデター勃発直後から、青年将校の説得役を務め、反乱部隊の帰還を促す「陸軍大臣告示」の作成にも携わった。「陸軍大臣告示」は、上記軍事参議官の会議の決定に基づき、山下と軍事課長の村上啓作むらかみ けいさく大佐が作成し、「諸子蹶起けつぎノ趣旨てんちようハ天聰ニ達シアリ」(天聰とは天皇のこと―引用者注)、「諸子ノ真意ハ国体顕現ノ至情ヨリ出タルモノト認ム」などと記され、一部からクーデターに同調的な内容であるとして問題視された(安倍1977)。

関連史料を見る限り、牟田口が二・二六事件で青年将校らと関わった形跡は見あたらな
い。しかし、牟田口も皇道派への「懲罰人事」を免れることはできず、二・二六事件直後
の一九三六年三月、北京の支那駐屯歩兵隊長に異動を命じられた。

牟田口はこれまでに在外派遣部隊での勤務経験がなく、そもそも部隊勤務も一九二六（大正一五）年から一年間、近衛歩兵第四聯隊大隊長を務めて以来、およそ九年ぶりのことであった。その九年間、牟田口はエリート参謀として陸軍省と参謀本部を渡り歩いていた。その牟田口にとって、突然の在外勤務は、左遷に等しかった。しかし、この人事が結果的に泥沼の日中戦争を引き起こすことになるとは、このとき誰も予想だにしていなかった。



君は、

ゼダイ人

何と闘うか？

<http://ji-sedai.jp/>

「ジセダイ」は、20代以下の若者に向けた、**行動機会提案サイト**です。読む→考える→行動する。このサイクルを、困難な時代にあっても前向きに自分の人生を切り開いていこうとする次世代の人間に向けて提供し続けます。

メインコンテンツ

ジセダイイベント

著者に会える、同世代と話せるイベントを毎月開催中！ 行動機会提案サイトの真骨頂です！

ジセダイ総研

若手専門家による、事実に基いた、論点の明確な読み物を。「議論の始点」を供給するシンクタンク設立！

星海社新書試し読み

既刊・新刊を含む、すべての星海社新書が試し読み可能！

マーカー部分をクリックして、「ジセダイ」をチェック!!!

行動せよ!!!